

シリーズ「アメリカン・ディアスポラ」第7回

「中米移民女性のトランスナショナルな母性の実践と

それが主体の感情に引き起こす影響」

浅倉寛子（メキシコ社会人類学高等研究所北東地域プログラム）

---

母性の意味は世界中どこでも同じなのではなく、時代や場所によって異なる。すなわち、子育ての仕方や「母」とは如何なるものか、また如何にあるべきかは各文化によって構築される社会的産物である。今回の講演では、メキシコ北東部、モンテレイ市周辺地区に定住する中米移民女性の事例をもとに、彼女たちによって実践される「トランスナショナルな母性」とそれが母親や子供たちの感情に与える影響を考察した。

1970年代以前までは、中米の人々の移動は中米地域内で行われていたが、1980年代以降、その行き先はアメリカ合衆国へと向けられてきた。1990年以前は市民戦争や治安の悪化といった政治的動機が主であったが、その後は失業や貧困などの経済的な動機で自国を後にする人々が増えていった。しかしながら、2001年以降取り上げられてきたアメリカ合衆国の強力な反移民対策は中米移民の入国を困難にし、それに伴い、中米移民の移動先の多様化を引き起こしてきたと言える。メキシコは以前からアメリカ合衆国へ向かう中米移民の中継地であったが、米墨国境を渡る困難から、メキシコ国内に滞在する中米移民も増えてきていると考えられる。

メキシコ、モンテレイ市周辺地区に住む中米出身女性たちの多くがアメリカ合衆国へ渡る目的で自国を出てきたが、金銭的問題や事故で旅を続けることができなくなったり、モンテレイで定職に就き比較的安定した収入の可能性を得るなどの理由で、メキシコに留まることになった。

これらの女性たちの生活は「母性」を中心に構築されていると言える。彼女たちの移民の動機は子供たちにより良い生活をさせることにあり、国境を挟んだ「トランスナショナルな母性」の実践は、それを実現させるためのやむ負えない手段なのである。しかしながら、子供のそばにいて面倒をみる、という母親による「集中的育児」モデルが先行する社会では、物理的距離をおいての子育ては、母親たちの中に「罪悪感」を引き起こす。だが、「悲しみ」「心配」「恐怖」「罪悪感」といったマイナス感情は、中米移民女性たちがさまざまな実践を行うための原動力ともなっている。遠くにいる子供に感情的援助を与えるため、頻繁に電話をかけることでコミュニケーションの円滑化を試みたり、最終目的である家族再統合を果たすため、貯蓄に励んだりするのである。

「トランスナショナルな母性」は母親だけでなく子供の感情にも大きな影響を与える。「悲しみ」によって引き起こされる不眠や集中力および成績の低下、さらには鬱病にかかる子供もいる。しかしながら、このようなマイナス感情は次第にプラス感情へ移行することもある。そのためには、親の移民の動機を理解したり、身近にいる親類との関係、将来の目標を持つことが大切になってくる。

「トランスナショナルな母性」の実践が母親の感情に与える影響は大きいですが、彼女たちはマイナス感情を移民の最終目的である家族再統合実現の原動力に変えている。しかしながら、母性を女性の唯一そして独占的役割として自然化する家父長制的ジェンダーイデオロギーがなくならないうちは、中米移民女性のジェンダー秩序を変革するたびは続くであろう。